

2004年度「女性の学習の歩み」実践・研究レポート選考結果報告

2004年度「女性の学習の歩み」実践・研究レポートは、例年にもまして高いレベルの作品が集まりました。昨年11月15日に選考委員会を開催し、厳正なる審査の結果、下記の2篇が入選および佳作に選ばれました。研究奨励金として、入選者には20万円、佳作者には5万円がそれぞれ贈られます。

選考結果

☆入選：学び、綴り、行動した私の歴史
原 輝恵さん（東京都）

☆佳作：立ちあがった「村の女战士们」
— K生活改善グループの歩み —
吉川 棗さん（岡山県）

◇選考委員

國信 潤子（愛知淑徳大学ビジネス学部教授）※委員長
江刺 昭子（女性史研究者）
小林 繁（明治大学文学部教授）

《選考委員による講評》

入選 学び、綴り、行動した私の歴史

日本の激動期、1924年生まれという一女性の戦後60年の「活動専業・主婦」の大先輩の記録です。しかも今も現役で地域に貢献している姿に感銘を受けました。学習・行動の結果を必ず何か出すという持続する志を感じます。認識—学習—知識蓄積—行動—政治的行動という実践と理論のスパイラルを無意識の中に歩んでいく様が、構成力に欠けるものの、スピード感とユーモアをもって語られる点が評価され、入選作に選ばれました。

この作品の読後、私は応募者の年齢を思わず再確認しました。戦前・戦後にわたり、女性が家族形成し、社会参加を継続しつつ生活するということの重さと、さらに個人の主体性が尊重される地域社会をつくるという弛まぬ努力に脱帽しました。

敗戦直後の価値観の急変を体験した、いわゆる「良妻賢母」となるための教育を受けた一女性の思想的変遷が実践を通じて語られています。まず子育て後の孤独、主婦役割喪失感から、PTAを通じて社会との接点をもったとき、「社会の事象をどうしたら理解できるようになるのか」という焦燥感へと移行していくのです。子育て一段落後の1965年、学習自主グループの発足、自治体からの学習費用の支援の獲得と、その活動を決して私的な趣味に留めず、社会化していく努力があります。ときには拒絶され失敗しつつも、決してあきらめない粘り強さと明るさがあることは、原さんの天性でしょう。

主婦たちの学習組織が専門機関との連携によって専門的知識の蓄積手法を習得し、それも26年間という長期の学習が継続できたことは並大抵のことではありません。学習内容も時代に即応したものであり、ゴミ問題、騒音などの学習結果から公害問題の本や、地域女性史の出版にまでこぎつけたことは、次世代への知識伝承の面でも有意義なことです。さらには地方自治体の有名無実の組織への公金支出を差し止めさせる行政訴訟という手段もとります。また、経済自立をめざして添加物のない弁当を作る作業所を発足させ、収入確保のレベルまでもっていき、その過程で夫も生活自立していくという波及効果もあります。

できるならば、文全体の構造化を明確にし、学習から行動に移行するときの心理葛藤、家族からの反応、組織内人間関係の軋轢、さらに政治的活動に至る過程で過重になる責任感などを乗り越える自省的側面を、もっと「自分自身との対話、思索のとき」をもちつつ記述されると、内容が立体的に重層化・構造化され、より多くの人々のために活動の手本となるでしょう。

佳作 立ちあがった「村の女战士们」 — K生活改善グループの歩み —

1部で岡山県のある山村の状況を説明し、2部でその村の生活改善グループが行った1956(昭和31)年から1994(平成6)年までの活動の歩みを追い、3部では生活改良普及員である筆者の立場から、生活改善グループが長期にわたって活動するにはどんな活動を行ったらよいかを考察しています。

男尊女卑と上下関係で閉塞していた村に、高度成長期に外から新しい風が入ってきたこと。その風を読み取り、食生活や農作業衣の改善をはじめ、共同育苗や自給運動に取り組み、ふるさと特産品の育成、消費者との交流へと、グループが主導して農家の生活から生産活動まで変えていく様子がよくわかります。型にはまった改善ではなく、グループ員自らが考え、実践したところに、女性たちの成長が読み取れます。普及員としての筆者の力量も大きいでしょう。

ただ、「村の女战士们」という標題にはちょっと抵抗がありますし、封建制の名残り濃い村に入った筆者が、グループ員とどうかわり、その過程であったであろう葛藤がほとんど描かれていません。また、「手間」と呼ばれていた「嫁」の地位がどう変化したのかもはっきりしません。そのあたりをもう少し書き込んでほしいと思います。

◆「女性の学習の歩み」研究セミナー（選考結果報告会）を
2月25日（金）に開催します。※詳細は裏表紙に記載